



どうする？ 朝来市生野町のミライ



市長が考える
生野の将来像は



閉山時を第一の転換期とすれば、今は第二の転換期。これまでの住民主体のまちづくりを引き継ぎながら、観光を中心に地域を活性化したい。

生野に市の施設が2つ増えます。新設する黒川の**自然環境保全センター**と、シルバー生野から事業継承する**生野銀山**です。オオサンショウウオや鉱山遺産は世界的にも貴重な財産で、それを市が守り活かすことは意味のある投資だと加藤は考えます。一方で課題が2つあります。一つは**担い手不足**というソフト面の課題、もう一つは**公共施設の維持管理**というハード面の課題です。加藤は、この問題は**教育と観光を結びつける**ことが鍵だと考えています。地域全体を大きな校舎と捉え、観光施設と教育施設の垣根を取り払うことで、施設の魅力向上や持続可能な地域づくり、子どもたちの郷土愛の醸成ができると思います。

自然遺産に投資する朝来市



自然環境保全センター設置の
ねらいは。

オオサンショウウオに象徴される市
川源流の豊かな自然を守り伝えら
れ、ともに、朝来市民の誇りとし

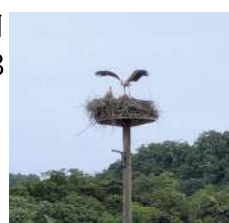


市は7月26日、黒川に自然環境保全センターを開設。工事費約2.5億円。運営は日本ハンザキ研究所。生き物の研究調査を実施し、オオサンショウウオの常設展示も行う。年間の支出見込みは1700万円で市民一人当たり約650円。入場料は大人300円、学生150円。年間6000名程度の集客、約100万円の入場料収入を見込む。



京都水族館の入場料は大人2600円だが、その目玉はオオサンショウウオである。その「キモカワイイ」姿に国内外の老若男女がカメラを向ける。その中で、交雑種の問題等の学びが得られる仕組みになっている。**遊びを入口に、学びを出口**にすることが大事だ。

豊岡市はコウノトリの野生復帰に年間約1億円を投じ、その約1/2が一般財源。豊岡市民7.3万人が年間約700円を負担している計算。農業の付加価値向上や市民活動の促進、シビックプライド醸成などの**成果を生んでおり**市民に定着した事業になっている。



朝来市内には2つの**自然学校施設**があり、双方とも年間3500～4000名の小学5年生を4泊5日で受入れている。この方々にセンターを訪問してもらうことは有効な施策である。そのためには、生野で1日学んで遊べる体験プログラムを構築する必要があると加藤は考える。

産業遺産に投資する朝来市



生野銀山の事業継承のねらいは。

生野銀山は日本遺産認定の大切な財産。企業の撤退により、市が事業を継承し銀山を守りたい。



市は来年4月に史跡生野銀山の運営をシルバー生野から引き継ぐ。年間客数は6.8万人(R6)。観光坑道に加え、資料館や鉱物館など多くの付帯施設がある。それぞれ建築から30-50年が経過しており、大規模改修には総額3億円以上が必要となる。集客のためのコンテンツづくりに加え、施設の維持管理が課題である。

琵琶湖疎水は近代土木事業の日本遺産で生野と類似する。ここではクルーズ船が人気だ。2時間6000円前後のガイド付きの船旅。国宝のトンネル3つを含む景色を楽しみながら、明治の京都復興に懸けた思いを知る。生野でも**日本遺産をフル活用した体験型コンテンツ**が望まれる。



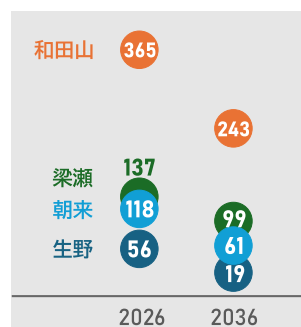
旧別子地区は江戸から明治にかけての別子銅山の中心地。現在は森に還る事業が進められている。ハイキングコースの中に静かにたたずむ産業遺産群は非常に美しい。遺産と展示施設は必ずしも隣接する必要はなく、**地域全体を博物館と捉える発想**が大事だと思う。

別子銅山に関する最も充実した資料の一つが**新居浜南高校ユネスコ部**作成のガイドブックである。88カ所の遺産を現地調査をふまえて詳細に解説。現役高校生によるガイドも行っている。**若者たちの熱い思い**が地域を盛り上げ、彼ら自身の郷土愛にもつながっている。



そろそろ話ませんか？学校の将来像

ソフト面の課題



市立中生徒数将来推計
出典)朝来市議会R8/6/12

「朝来市立学校の在り方に関する方針」では中学校の理想的な生徒数を150人以上としています。多様な人間関係を経験するためです。一方で生野中学校はさらなる生徒数減が予想されます。同方針によれば小規模化が進む場合、以下の手順で進めます：
①地域とのさらなる連携等、小規模でも多様な人間関係を生む施策を行う
②それでも難しければ地域からの意見を踏まえて統合等を検討する

ハード面の課題



他方、生野中は建築から49年が経ち老朽化が進んでいます。「朝来市学校施設等長寿命化計画」ではR9に6.4億円の事業費で長寿命化工事を計画しています。外壁、内装等を改修し30年程度の耐久化を見込みます。ただしこれはR2の計画策定時の話で、時期・内容等は状況に応じて対応します。良い学校づくりは、ソフトとハードの両面から考える必要があります。地域と学校のより密な話し合いが今後求められます。



生野中学校の長寿命化工事は現状ありきで行うのか？それとも新しい学校を地域と作るのか。

学校改修の実施段階で、改めて事業内容を適切に判断する。



参考事例

- ①多可町＝町内3中学校を統合し、多可中(435人)を新設。
- ②加東市＝旧町ごとに小中一貫校化。写真は社学園(1256人)
- ③宝塚市＝北部の西谷小(32名)・中(27人)を特認校化して市内全域から募集。地域と連携した活動を推進。
- ④生野町＝コワニエが指導した生野鉱山学校(明治2)は特定の校舎を持たず、実地で鉱山技術を教えた。(写真出典：生野鉱物館)

遊びと学びを掛け算し、「発掘」の町を目指そう

生野町の人口は人口2924人(R8/5)。観光施設や教育施設を別々に整備・運営しては、10年後には無理がきます。遊びと学びの融合が必要です。それを加藤は「発掘」と名づけます。発掘はこども、地域住民、観光客それぞれが好奇心によって町の宝や自分の力に気づき、探究心を使ってそれを深め高める行為です。ソフト面とハード面それぞれで両者が融合することで、生野はコンパクトながら持続可能で質の高い自立したまちづくりができると加藤は考えます。

